

第 40 回 日本中小企業学会全国大会

統一論題 解題

中小企業研究の継承と発展 —日本中小企業学会 40 年間の軌跡—

日本中小企業学会会長 佐竹 隆幸
第 40 回全国大会プログラム委員長 堀 潔
第 40 回全国大会準備委員長 長山 宗広

1980 年 10 月、日本中小企業学会は設立（第 1 回会員総会）された。今年は、40 周年を迎える記念の大会となる。本学会は、「中小企業研究に関心をもつ多様な専門分野の研究者を結集し、中小企業の総合的・学際的研究を発展させ、その成果の普及を図る（学会会則第 2 条）」ことを目的とし、毎年 1 回の全国大会や地区部会の開催、学会年報『日本中小企業学会論集』の発行（同友館刊）など活発に事業を行ってきた。現在、経済学、商学、経営学、会計学、工学、社会学、地理学、法学、政治学、行政学などをはじめとする様々な学際的分野の第一線の研究者多数が参加し、会員 500 名を超える。

日本独自の中小企業研究は 100 年の伝統を持つと言われる。その研究蓄積の一端は、『日本の中小企業研究』と題し、10 年ごとに研究成果をまとめる形で刊行が重ねられている。日本の中小企業研究には長い歴史があり、これまでの研究成果そのものは先人の著した書籍や論文を読むことで知ることができる。しかしながら、そうした偉大な中小企業研究者が、なぜ、どのような経緯で中小企業研究に取り組むようになったのか、どのような問題意識を持ち、どのような発想や方法で中小企業研究に取り組んできたのか、中小企業研究者の社会的な役割などについてどう考えているのか、中小企業研究への情熱や思い等々、文面のみでは容易に知ることができない。

そこで、40 周年記念となる今回の日本中小企業学会全国大会においては、『中小企業研究の回顧と展望』をテーマとし、本学会を長年にわたり牽引してきた中小企業研究者に登壇してもらい、「世代間の研究の継承」の機会を持つこととする。本学会 40 年間の軌跡を振り返りながら、日本中小企業研究の到達点と課題、今後の展望を共有する。現代経済における「中小企業」とは、一国の国民経済下の一要素として画一的に捉えられるものではなく、多様性や固有性が認められ、そこでの学習を通じた主体形成に発展可能性がある。異質多元的な中小企業という存在に対する「統一的理解」の前提なくして、中小企業研究の「継承」と「発展」はかなわない。今一度、「中小企業とは何か」という、中小企業研究の出発点にして最大の本質論的な研究課題を考えたい。中小企業研究の理論・本質論的、政策的、経営的、歴史的、国際比較的な総論的研究を牽引してきた先人の言葉にふれていき

たい。その上で、日本中小企業研究は、日本あるいは世界の社会科学のなかで、どのような学問的独自性を持ち、本学会がどのような学術的・社会的意義および対外的な発信を求められているのかについて考えたい。世代をこえた活発な議論を通じて、中小企業研究および本学会の発展可能性、これからの展望を模索することを目指す。